

令和元年度 長野県須坂高等学校 卒業式 学校長式辞

思い出したように降る雪が、強い日差しに溶けるこのごろ、まれにみる暖冬が終わりを告げようとしています。

238名の皆さん、卒業おめでとう。未来ある君たちにとって、高校は通過点ですが、大切な思い出が詰まった、あつという間の通過点だったと思います。この学年は、校長として最もたくさんのことを語ってきた学年でした。なぜならば、須坂高校のこの3年間は、97年の歴史の中でも、最も早く最も大きく変革した時期だったからです。皆さんが2年生の時、授業時間や部活動の在り方が変わり、修学旅行は沖縄から台湾になり、海外研修の機会がどの高校よりも増え、新たに哲学対話も始まりました。また、春のクラスマッチの在り方や、りんどう祭の在り方を考え直すようにと厳しい課題を出しましたのもこの学年です。

学校の外では、元号が変わり、大学入試改革が迷走し、台風19号が北信地区を襲い、今はコロナ・ウィルスが猛威を振るっています。君たちは、様々な変革や異常事態の真ただ中にありながらも、いたずらに翻弄されることなく、むしろ、変化に向かって挑戦し、須坂高校の歴史に鮮やかな足跡を残した学年だったと思います。あこがれの先輩に成長した君たちには、直接あつて感謝の気持ちや花束を渡したいと思い、はじめての昇龍会企画していた1, 2年生のこれからを見守り続けてほしいと思います。

私は、君たちが、どんな職業に就こうとも、須坂高校卒業生として絶対に持っていてほしいものがあります。それは、「より善なるものを追究する志向」つまり「哲学」です。哲学のない市民、エンジニア・行政マン・教育者・法律家、医療従事者、研究者になつてはなりません。なぜならば、そういう者の集団は、けつて社会を正しい方向へ導くことはないからです。君たちには、「なにがより美しい在り方なのか」「みんなはそう言うけれど本当にそうなのか」を常に自問できる人間になつてほしいのです。

自然界の異常は人類の思いあがつた暴挙の結果です。かつて、アリストテレスは、「人間は社会的動物だ」と言い、パスカルは、「人間は考える葦である」と言いました。人間のどうしようもない弱さを補完するために、社会的になる必要があり、考える必要があるのです。ところが、技術革命により、人間は、どんどん傲慢になり、強くなつたような錯覚を抱くようになりました。加えて、「哲学」のないリーダーたちが登場し、個人の思いだけで「人類への責任」を放棄するような政治を始めました。

台風やコロナ・ウィルスのような自然界の猛威は、人間の脆弱性をあばき、「新しい時代の社会的動物になれ」「新しい時代の考える葦になれ」と私たちに迫っているようです。

春の来ない冬はありません。激動の3年間「よりよい自分、よりよい須坂高校」を追究してきた君たちなら、希望を胸に、様々な課題も乗り越えられると信じています。君たちの出番を時代は待っています。

さて、家では、君たちを見守り続け、君たちの卒業を共に喜びたいと願う保護者の皆さんが待っていることでしょう。これまで須坂高校を支えてくださった西澤 PTA 会長様はじめ保護者の皆様にはこの場を借りて卒業の祝意とともに厚く御礼を申し上げます。このような形になつたことが大変残念であり、心苦しんでいます。

また、永田同窓会長様はじめ、りんどう会の皆様には、物心両面で支えていただきましたことも併せて、感謝申し上げます。

最後に一言、2つの龍はいつまでも君たちの味方です。職員一同を代表し、「君たちの未来に幸あれ」とエールを送り、式辞とします。